

第五章 結論

「変文」の韻文は、7言の近体・古体両詩が空前の繁栄を享受し、最強の韻文文化として社会的にも大きな影響を与えた唐代においてこそ、誕生し得た形式である。一見すると違いのないように見える各作品の韻文であるが、実際は講経文・縁起因縁類・変文類の如く種類によって独自の特徴を有している。それは、唐の時代が、「変文」としてまとめられる各々の語りものを受け止め、発展させる土壌を有していた所以であろう。

講経文の韻文は、一般的に、4句或いは8句毎に押韻し、6言か7言を用いた仄声韻及び「平一仄一仄一平」形式と7言平声韻を重ねて作られている。全編において「二六対・二四不同」の平仄が遵守されており、特に7言平声韻部分は外見上、近体詩とほぼ等しい。講経文を演じる俗講の場では、前半部分を内容が分かる程度に朗詠し、この平声韻部分を何らかの曲調で——或いは楽器も用いて——唱っていた。この時代、教坊曲等の歌詞には近体詩の七言絶句が用いられており、韻文の唱い手である梵唄は、通俗曲を度々非難しながらも、より多くの信徒を得るために、それらと大差ない形式で演じていたと考えられる。一方、押韻について見れば、典型的な河西方言を表す出韻がほとんど見られず、逆に中原地域における標準音へと繋がる特徴を見出せることから、作品の多くが中原で制作され、敦煌へ流入したものと結論付けられる。

縁起・因縁類の韻文は、講経文よりやや精度の落ちる平声韻と6言句の「平一仄一仄一平」形式を主として、散文と韻文を頻繁に繰り返す構成で作られている。現存作品の制作はおそらく講経文の後であると考えられるが、当該作品の仄声韻が次第に嫌われて各段落の分量が短くなっていく変遷をうかがうことができる。縁起・因縁類は、僧侶一人が演じる「講経文の簡易版」といえ、制作者も講経文と同じ層を想定してよい。とりわけ朱筆で標注が残る「歓喜国王縁」の甲巻は、講経文に匹敵する規則性を有しており、これらがやはり演じられたものであることを物語っている。さらに、押韻的には、河西方言を疑わせる鼻音語尾の出韻が多く、比較的後期に敦煌一帯において作られた可能性が高い。

変文類は、一定分量の散文と韻文を繰り返し、形式上は講経文のような規則性はないが芸術性が高い「降魔変文」「漢将王陵変」「王昭君変文」の如き第一の変文と、7言4句の極端に短い韻文を頻繁に挿入する形式で構成される、仏本行系の「八相変(一)」「太子成道経」の如き第二の変文に大別できる。第一の変文は、転変で唱われていた平声韻の韻文が改変されて一つの作品となったものであり、内容及び視点の変化に沿った韻の選択や換韻、或いは一句の途中での地の文と会話文の交替等、歌行作品とよく似た加工がされている。但し、《王昭君変文》のように転変時から優れた平声韻で構成されていたと考えられる作品においては、唱われた韻文を比較的好く残している。一方、第二の変文は、多くの同一写巻や敦煌産の奥書を有しており、やはりすでに語ることを離れて、写経や備忘録として広く流通していた作品である。その韻文は、語りもの由来の厳格な形式を持つものもあるが、改変された平仄の整わないものや、縁起・因縁類の短文化がさらに進んだ影響か、仏典の「偈」の形式を模した大量の7言4句も混在し、あまり統一性がない。押韻の面から言うと、第一の変文の一部と第二の変文の大部分は敦煌一帯で作られた可能性が高く、現存写

巻の数から鑑みても、これらが当地で広く歓迎されていたことをうかがわせる。

このように、「変文」間の差異は、各々の上演方法や制作の意図に深く関わっており、韻文は長い時間をかけて、より相応しい形式に改変されてきた。代表的な二種を見れば、講経文が語りものとしてより多くの聴衆を得るために、当時の音楽と深く結びついて一層の規範化に向かった反面、変文は、文字化するにあたって平声韻や平仄のこだわりを減じて芸術性を追求した。したがって、「変文」作品を一括りにして論じることはできず、字面だけではなく、各作品の語りの場を踏まえた議論が不可欠である。

「変文」の韻文は、絶句を歌詞に用いた唐代燕楽の隆盛を背景に、民間歌謡や七言詩の伝統が結びついて生まれた独自の語りもの形式である。とりわけ講経文の韻文は、誰にでも分かる平易な内容に近体詩の高度な規則を組み合わせられて作られた、韻文史上、あまり例を見ない独特の存在である。その独自性は、もっと評価されてよいのではないか。

*

一方で、今回の分析では見えなかったこと、遣り残したことも数多く存在する。

一つめは、敦煌のその他俗文学との比較である。唐詩との比較同様、「変文」と同時に発見された韻文作品、具体的には「雲謡集」等の曲子詞や浄土讃文の如き讃文類との関係を分析し、敦煌における「変文」の位置づけが早急に為される必要がある。今回の論文には反映できなかったが、曲子詞の押韻は「変文」と異なり、写巻によってかなりのばらつきがある。齊言句の絶句を用いた楽曲から長短句の曲子詞へ、という中国音楽における重要な転換点を考える上でも、これらの分析は不可欠なものとなるだろう。

二つめは、「変文」の散文部分との関わりについてである。本論では、敢えて韻文のみにこだわったために、散文との有機的な繋がりを絶つ結果となってしまった。たとえば、修士論文『敦煌変文の韻散混合文体分析』において分類した「変文」の「重複型」及び「同時進行型」の分析をさらに進めることで、同じ内容で異なった形式の韻文を繰り返す作品と同様、散文と韻文で同じ内容を繰り返す作品についても、語りものの性質を疑うことができるだろう。「変文」の上演をより総合的に考えてゆく上で、特に、従来はあまり省みられてこなかった講経文の散文部分等の分析も必要であると考えられる。

三つめは、語りもの文学という通時的観点から「変文」を位置づけ、「変文」が果たした役割を解明することである。今回の論文を、その端緒としたい。

敦煌変文研究は、これまでとかく自己完結した閉鎖的な学問として存在してきた。数百年の時を越えて突如現れた膨大な量の敦煌遺書は、それ自体で計り知れない価値を有しており、多くの新しい発見をもたらしたが故に、同時期の他文学との繋がりを薄くし、研究の方向を主に内部へと加速させていったからである。しかしながら、「変文」も唐代における豊かな韻文文化の一つとして、唐代文学の只中に位置づけられるべき存在である。変文研究をさらに開かれたものとしていくことは、唐代文学のみならず、語りもの史や仏教文学史のなご一層の解明にも役立つであろう。